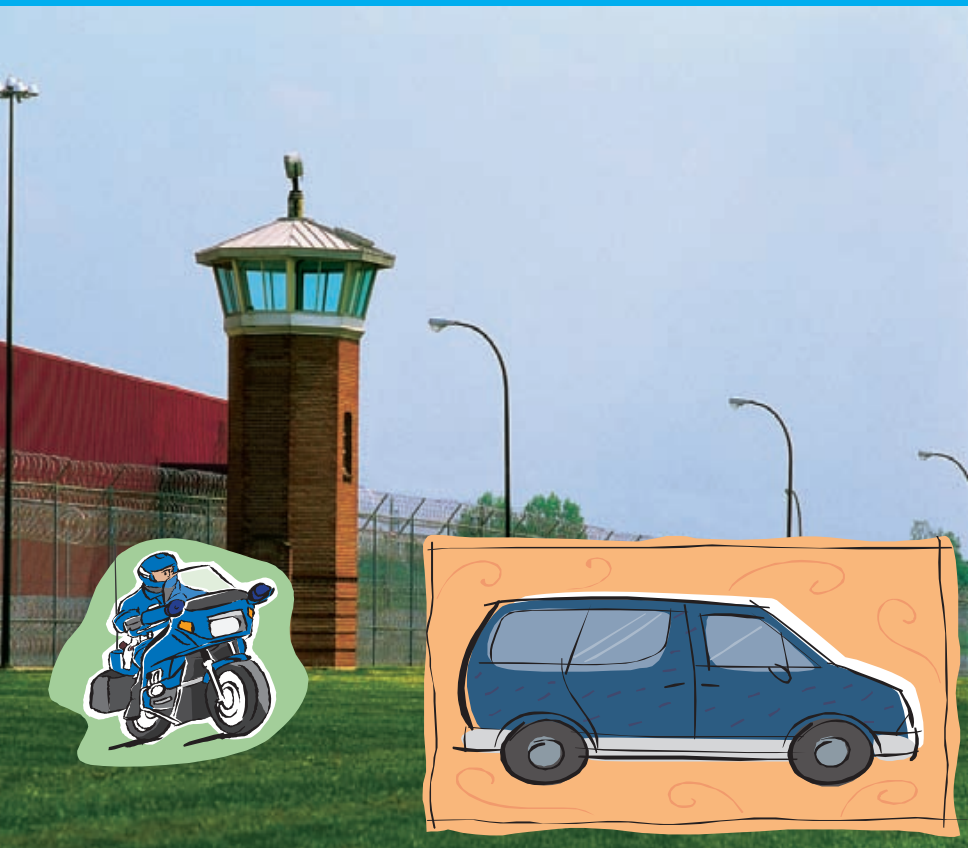


# 武蔵野の氷雨

## 時効事件 ①



昨夜来の師走の氷雨が武蔵野の雑木林にしとしと降り続く。

つい半月前までの、コナラ、クヌギの西日を浴びた紅葉やコケラ、シジュウガラ、ツグミ、ジョウビタキの特異な音色も記憶の彼方に去り、冬の雑木林は陽から陰の深みへと落ちてゆく。

国分寺市国分寺駅北口にある『レインボーホテル』のフロントの案内板には結婚式は田野原家と辺田家一組であった。それもその筈、今日は大安でなく、凶日の赤口。

二階の各親族控え室では、桜茶を啜っている。遅れてきた山口銀蔵が新郎の伯母を伴い、田野原家の部屋に入るなり、禿げ頭から顔にかけ、脂ぎった光沢をみせながら、開口一番口走った。

「来る途中、府中街道で検問に引つ掛かったもんで、遅れちまったわ。ロビーのテレビの前は黒山の人だかりだった。何しろ、現金輸送車が偽白バイに襲われ、輸送車を乗り逃げされたらしいわ」

「どうりで、先程からパトカーのサイレンがやかましいと思つてたところよ」

新郎の母菊乃が応じた。

「場所は何処じゃ？」と新郎の父吉右衛門が金縁眼鏡を押し上げ、問う。

「府中刑務所の脇の道だそうだわ」

「この近くじゃないか」

「それに、その現金輸送車は前にある日本信託銀行国分寺支店から出たそうだ」

一同は、本當かいなどと言いつつ、西側の廊下に出て、窓から下を見下ろす。パトカーと白バイが数台停車していて、遠巻きに群集が囲っている。新郎の田野原智次郎が白いワイシャツに薄紫のネクタイとチョッキを身に付けたロングタキシード姿で新婦の輝子に近付き、「腹の具合が少しおかしいので、トイレに行ってくる」と、背に合つた大きな手で腹を押さえている。

「あなた、大丈夫……。後十分で式が始まるわ」

色は純白で、VネックのAラインスタイルの輝子が渋い顔となる。

「間に合わなかったら、少し遅らして欲しいと神主さんに伝えて・・・」

「分かったわ、早く行つてらっしゃいよ」

五分ばかりオーバーした午前十時五分から神前で外の騒ぎとは裏腹に、厳肅な内に式が進んだ。

雅楽が奏じられ、修祓、祝詞奏上と続き、誓杯の儀では酒好きな輝子は最後に干した。智次郎は誓詞朗読で動悸の高鳴りとともに、声が震えているのを自覚し、落ち着けと言ひ聞かせるほどに逆効果となった。仕方なし、初体験なんだからと開き直った時に鼓動は静まったが最後の段になつてい

た。智次郎の後に輝子も名前を読み上げる。蔦模様のプラチナ指輪を交換した。うやうやしく玉串を捧げた後は親族杯の儀で終了となつた。写真室に移動して、二人だけと集合の記念写真を撮つた。これで、両家が親族となり、控え室で中肉中背の

吉右衛門が笑みを浮かべ、姉夫婦、妻の兄妹と三男二女の子供達を紹介した。バトンタッチした新婦の小柄な父武春が姉夫婦とその長女、次女を紹介し一番下の長男は今日が就職試験日で欠席したと言う。更に、妻治美と妻の弟妹をお辞儀させ、輝子の姉明子と弟の光男で締め括つた。

二十分の休憩を挟んで、正午からは二階北端にある『鳳凰の間』で披露宴が執り行われる手筈になつてゐる。幾つもの豪華なシャンデリアが灯る下には、招待客が続々と集まり、指定された丸テーブルに着席してゆく。犯人がまだ捕まつていないみたいと口々に言い合つてゐる。

総勢三百人の参加予定で、田野原家側が二百五十人を占める。智次郎は、二歳上の長男誠太郎が昨年皇居前の帝国ホテルで五百人を集め、盛大に結婚式を行ったが、自分は次男であり、また新婦は大学四年なので簡素にやりたいと父に申し出たが、来年の衆議院選挙での再選が重要であり、冠婚葬

祭は議員にとつて重要な行事だと言われてしまった。敷地に新居を建てて貰つていて大きな口は利けない。それを飲む代わりに地元で行いたいと土下座までして、認めさせたのだ。

定刻になり、司会者がマイクに厚い唇を向けた。

「私は赤松健太と申し、新郎智次郎君とは流星大工学学部機械科の同級生であり、またクラブ活動の自動車部でも一緒です。彼から司会の依頼があった時には、経験もないし、政財界の重鎮の方々がいらつしやると聞き及んで益々尻込みして、プロの方を頼んだらと即座に言いました。彼は気さくな披露宴にしたいのでと居酒屋で再三口説かれ、そこまで言うならと男として引き受けた訳であります。当日は飲食が出来ないからと、一週間前の打ち合わせ後に、呑み助の私にたらふくおごつてくれました。気配り抜群の奴で・、いやもとい、気配り抜群の新郎です。何分にも不慣れですので、行き届かない点は多々あります。どうせではない、

どうか目出度い席に免じてご容赦頂きます・。」  
ちらちらと視線を手元のメモに落としながら、額に滲む汗を右手で拭きながら、隅々まで行き渡るやや濁声を発している。招待された居酒屋は板敷きであり、翌日腹の調子が悪く、下痢になったことを彼は思い出した。

何時もの早口に輪を掛けていたので、落ち着くと智次郎は呟く。

「前置きが長くなりましたが、只今より、田野原家と辺田家の結婚披露宴を開催致します。ご両人のもとより、ご両家の皆様方、またご親族の方々に心よりお祝い申し上げます。お目出度う御座います。また、ご臨席賜りました皆様様に厚く御礼申し上げます。それでは主役の新郎新婦に入場して頂きましょう」

場内の照明が一斉に消され、大扉から光が差し込む。廊下に待機していた新郎新婦が手を携えて、中央扉から赤絨毯を歩き出すと、神の啓示に現れ

続きは  
完成版で  
お楽しみ下さい。